

飼育レポート

report
01

キリン「カンタ」の思い出

飼育展示担当 柴田 典弘

2022年1月2日早朝、キリンのカンタが死亡しました。カンタは2012年6月14日に長野市茶臼山動物園から繁殖を目的としてやって来ました。

通常、来園後3日間から1週間程度は、長い時間を過ごす室内の環境に慣らすため、すぐには外に出さず収容した状態で観察するのが一般的ですが、カンタが来るまでの約1年間を一頭で飼育していたリンリン(メス、当時8歳)が室内にいるカンタを全く警戒していなかったことや、収容した状態のカンタが落ち着かず、与えた飼料を採食しなかったほか、室内での周回や往復などのストレス行動も確認されたことから、急きよ翌日から柵越しの見合



カンタ(2019年3月)

いを実施することになりました。外に出た2頭は柵越しに向き合い同じ枝の葉を食べ、互いに顔を寄せ合うなどの理想的な行動が見られたため、来園3日目の6月16

日から同居を開始しました。それ以降、2頭はずっと一緒に飼育してきたキリンのように良好な関係が続きました。ハズバンドリートレーニングも順調に習得し、このまま健康で長く愛されてほしいと願っていました。

2019年には初の交尾を確認。この1度の交尾で妊娠し、2020年7月14日にリンリンはケイタ(オス、現在2歳)を出産し、カンタは自分の子孫を残してくれました。

2021年12月30日、急激な食欲低下や下痢などの症状が出たため、注射や内服の治療を行いました。2022年1月1日には、食欲が戻るなど若干の回復が見られましたが、翌2日早朝に寝室内で倒れ込み、午前7時頃に死亡を確認しました。

通常、オスのキリンは成長と共にゴツゴツした特有の顔つきに変化することが多い中、カンタは最後まで幼さが残っていました。11歳という早過ぎる生涯でしたが、カンタからはキリンの飼育についてたくさんのことを学び、たくさんの思い出をもらいました。

ありがとう、カンタ。



まんまタイム(2017年4月)

report
02

リリーの体調不良とその対応について

獣医師 小川 裕子 飼育展示担当 西方 理

アフリカゾウのリリー(メス、推定33歳)は、2018年10月に仙台市八木山動物公園から、当園のだいすけ(オス、死亡時推定31歳)との繁殖のために来園



飼育員15人がかりの吊り上げ作業

しましたが、2021年3月にだいすけが死亡したため繁殖相手がいなくなり、2022年7月に八木山動物公園へ帰る予定となっていました。

しかし、2022年4月23日、リリーは体調不良で突然倒れてしまい自力で起き上がれなくなりました。ゾウが倒れて起き上がれなくなると、3トン近くある自らの体重で内臓が圧迫されて血流が悪くなり、循環不全や呼吸不全に陥り死亡する事があります。このような場合、チェーンブロックで吊り上げると、再び自力で立てることもあるため、すぐに吊り上げ準備に取りかかりました。吊り上げ作業は初めての経験でしたが、以前に八木山動物公園のチェーンブロック講習会に参加させてもらった経験が活かされ

ました。作業開始から約2時間でリリーの体を起こし、最後はリリーが後肢をふんばり自力で立ち上がることができました。

その後のリリーの体調管理や治療については、八木山動物公園をはじめ、多くの動物園と連携を取りながら継続して行っています。食事や運動についても、普段より多くの樹木を与えたり、エサで誘導してコミュニケーションをとりながら歩かせるなど、体調の維持に努めています。

こうした取り組みもあり、リリーの体調は落ち着いているように見えます。体調不良の原因については、はっきりとは分かりませんが、定期的な血液検査等を行い、継続的に経過を観察しています。

今後も冬に向けて寒さ対策を万全にするなど、リリーが無事に冬を乗り越えられるように、ゾウ担当一丸となって取り組んでいきます。



自力で立つリリー

report
03

チンパンジーの豊かな暮らしのために

飼育展示担当 舘岡 幸枝

皆さんは「環境エンリッチメント」という言葉をご存知でしょうか。これは、限られた空間の中でも動物たちの野生本来の行動を引き出し、健康に暮らすことができるような取り組みのことをいいます。今回はチンパンジーの食に関する環境エンリッチメントについてご紹介します。

チンパンジーは、野生下では一日の大半を食物の獲得に費やします。木の実や木の葉、樹皮や樹液に留まらず、シロアリなどの昆虫や卵など多種多様なものを食べ、道具を使用してエサを取ることで有名です。しかし、動物園では飼育員がエサを準備するため、探す必要がありません。これにより生まれてしまう「暇な時間」は、チンパンジーにとってストレスとなり、病気の原因となることもあります。

そこで、採食時間を延ばし暇な時間を減らすために、エサが取りづらくなるよう細工をした容器（フィーダー）の中にエサを入れて与えています。

例えば、消防ホースや空のペットボトルに、ペレットやヒマワリの



消防ホースとエサ

種・クルミなどを入れたものや、枝を使えばジュースが飲める仕掛けのものなど、なるべく多種多様な品目を用意しています。

当園では4頭のチンパンジーを飼育しており、それぞれの個性に合わせたフィーダーを用意しています。最年長のジェーン（メス、55歳）はとても器用で、枝を穴から差し込み、ジュースが入ったお皿につけて舐めるタイプのフィーダーが得意です。枝先をかみほぐして繊維を広げ、より多くのジュースを舐められるように工夫しています。一方、J太郎（オス、17歳）は消防ホースの中にナッツなどを入れたフィーダーを与えると、一生懸命取り出そうとしますが、うまくいかないと逆にストレスになるため、程よく中身が出せる長さのものを与えています。

チンパンジーの豊かな暮らしのために、今後もさまざまな取り組みに挑戦していきたいと思っています。

ジュースがついた枝を舐める
ジェーンreport
04

ベビーラッシュでにぎわうサル舎

飼育展示担当 鈴木 昌典

2020年10月に新しいサル舎が完成し、翌年3月のオープンから1年半が過ぎた最近のサル舎の近況を報告します。現在、サル舎はベビーラッシュです。

2021年11月にフクロテナガザルに初めて赤ちゃんが生まれ、2022年3月、5月にはワオキツネザルに2頭、7月にはアビシニアコロブスにも1頭赤ちゃんが生まれました。

フクロテナガザルは、サル舎完成に合わせて当園で初めて飼育し、繁殖も初めてでした。母親のワタルも初産だった事から心配でしたが、しっかり子育てをしています。赤ちゃんだった「天（テン）」も成長し、最近は一人で遊び活発に動き回っています。



フクロテナガザルの母子

ワオキツネザルには2つの大きな群れがあり、それぞれの群れから1頭ずつの繁殖です。こちらにも順調に成長していますの

で、群れの中から背中に抱かれていた子どもを探してみてください。

アビシニアコロブスのレイアは3回目の子育てです。1回目、2回目の出産時期は冬でしたが、今回は夏の出産になる事が心配でした。レイアは出産後の数日は、子育てに疲れた様子でしたが現在は落ち着いており、ベテランお母さんとして安心して任せています。アビシニアコロブスの赤ちゃんは、大人とは異なり全身真っ白で、この白い姿を見られるのは生後3か月ほどです。徐々に黒い毛が生え、秋には大人と同じ色の体毛に変化します。サル舎のかわいい子どもたちをぜひ見にきてください。



アビシニアコロブスの母子

report
05

ユキヒョウの赤ちゃん誕生

獣医師 湯澤 菜穂子

2022年4月30日、大森山動物園では22年ぶりとなるユキヒョウの赤ちゃんが誕生しました。母親のアサヒ、父親のリヒトにとって初めての子どもで、性別はメスです。アサヒは出産当時10歳で、ユキヒョウの初産としては国内最高齢となりました。

今回の繁殖シーズンがこの2頭の初めてのペアリングで、アサヒの年齢が繁殖にはやや高齢であったこともあり、残り少ない貴重なチャンスを逃すまいと観察を続けていましたが、アサヒの発情兆候がなかなかみられず、不安続きの日々でした。

1月中旬になり、やっとアサヒの発情兆候が確認され、その翌日からすぐに2頭の同居を行いました。繁殖には至



リヒト(左)とアサヒ

らなかったものの交尾経験のあるアサヒに対し、何もかもが初めてのリヒトは、同居初日は戸惑いから逃げ腰でしたが、目覚ましい成長を見せ、ごちないながらも数日間にわたり交尾体勢をとったことを確認しました。

同居から約3ヵ月後、産箱のカメラ越しにアサヒが1頭の赤ちゃんを出産するのを

目にする事ができました。初産であるにもかかわらず、アサヒはしっかりと子育てをしており、立派なお母さんです。

赤ちゃんはすくすくと成長しており、特に自分でお肉を食べるようになってからは日に日に大きくなっているように感じます。定期的に健康診断を行っており、以前は一部発達状況に留意すべき点もみられましたが、成長とともに改善し、今では展示場を元気に駆け回れるようになりました。引き続き、赤ちゃんが健康に成長していけるよう見守っていきます。



赤ちゃんとアサヒ

report
06

コウノトリの有精卵移動

飼育展示担当 齊藤 光貴

日本では、野生のニホンコウノトリは乱獲や環境悪化により、1971年に一度絶滅しました。2005年に兵庫県立コウノトリの郷公園で日本初放鳥が実施され、その後は野外でも放鳥個体が繁殖し順調に数が増えています。2022年8月には野生個体数が300羽を超えました。

大森山動物園では、野生のコウノトリの遺伝的多様性を図るため、当園で飼育しているコウノトリの有精卵を他施設に移送する取り組みを行っており、移送した卵はヒナになって成長すると野外に放鳥されます。

今年は5月10日に、千葉県野田市にあるコウノトリ飼育



コウノトリのつがい

施設「こうのとりの里」に当園の有精卵を移送し、5月12日に無事にヒナが1羽誕生しました。このヒナはオスで「はく」という愛称がつけられました。「はく」はすくすく育ち8月3日に施設の天井のケージを開け、5日に大空へと飛び立ちました。放鳥する時は、野外でもどの個体が識別できるように脚に色のついたリングを付けますが、「はく」は左脚に2つの青リング、右脚に青と緑2つのリングがつけられています。

放鳥されたコウノトリは全国で飛来が確認されています。

もし、秋田で見かけることがあれば、脚についているリングの色を見てみてください。「はく」が生まれ故郷の秋田に帰ってきているかもしれません。



水辺を歩く「はく」(野田市提供)